

# 大正から昭和のお茶の水の幼稚園

「日本幼稚園史」の著者、新庄よしこの  
生きた時代

## 日本幼稚園史と経緯

寛き心ときを欲うてあり付し

看りたきて書きさくありしか

弱き住ばんにあはぬをうしこして

一頁を籠り史書きつきの

い寝かてす夜半書きつけばあふしも

草のすくみのかくしも書き

昭和九年

よしこ



倉橋惣三・新庄よしこ共著「日本幼稚園史」の著者新庄よしこ氏は一月四日に死去された。日本の幼稚園の草創期の資料を保存するのに功績のあった氏を記念して、当時の園児の目から見た幼稚園の姿を掲載しておく。

上の写真は、新庄よしこ氏の「日本幼稚園史」編さんのころの自筆による短歌である。

津守 真

## 大正末期の

### 幼稚園

私はよく、同じ線の市電ぞいに勤め先のある父に連れられて幼稚園に行つた。父が帰るのを追つて泣いて、新庄先生を困らせたこともあったが、幼稚園は好きな方だったと思う。

在園中に皇后陛下の行啓があつて、子ども心にも特別な感じをもつた。私たちの林の組はお店やさんごっこをお目にかけた。私は八百やさんで売るものを粘土で作っていた。粘土をこね回している私に「それは何ですか」と陛下がおたずねになったことは覚えていゝるのに、何を作っていたのか、何とお答えしたのかは覚えていない。

大震災のあとで、園舎は粗末なバラックだったが園庭は広くてはずれの塀は煉瓦だった。すみの方に煉瓦がたくさんおいてあつて、それをけずつてはおままごとのご馳走にした。春にはたんぼばがいっぱいだった。聖橋ひじりの見え

る石段（今も残っている）の方までお散歩に連れて行つていただいた時の写真もある。

目をつぶると、天井の高い暗い廊下、お弁当をあたためるへや（これはふしぎと現在のお茶の水の幼稚園と全く同じように思う）一生懸命に見入つた人形劇等々、次から次と浮かんできて、でもどういふわけか、友だちのことは非常におぼつかない。わずかに家も隣り同士でいままも交際している、あいちちゃん、だけといていい。友だちのこととなると、母の方が覚えていゝる。私が覚えていゝるのはやはり先生のことで、いつもはかま姿で、大きな目と、大きな声の新庄先生、私は幼稚園を出てからもずっと文通をかかさなかつた。そして私が保育実習科に入学した時は、もう新庄先生はお茶の水にはいらつしやらなかつたが、及川先生があたたか

### 赤間峰子

幼稚園時代の思い出、それはきれぎれではあるが、私にとってやはり忘れられないというもののよう気がする。当時お茶の水幼稚園は、本当に「お茶の水」にあつた。現在、医科歯科大学のあるところ、神田川に面して大して立派でない門があつて、そこからだらのぼりの道を行くと幼稚園であつた。門の前に立つと省線のお茶の水駅が見えて、その駅の模型を共同製作で作つたことを覚えていゝる。

く迎えてくださった。幼稚園のころ、及川先生は「よその組のこわい先生」だったのに私のことを私自身よりよく知っていらしたのにびっくりした。でも両先生とも私をいつまでたっても園児のように思っていたら嬉しい。及川先生は「峰子さん」新庄先生は「峰子ちゃん」としか私をお呼びにならなかった。

これを見ると、幼児と保育者のかかわりは非常にむずかしく、大切にしなければならぬと今さらのように思う。残念ながら私の保育者としての期間は短かく、その上、間に戦争といういまわしいものをはさんで、とても望ましい保育、つながりができなかった。私は時おりその当時の園児のことを思い出し、新聞やテレビなどで名前を見るとあわてて名簿をめくって、本人だとわかった時は何だかわくわくするよう

な気持ちになる。私が保育者の道を選んだのも、どこかに先生方のそのころに私に与えてくださった何かがあったのではないかと今にして思っている。

私の母も、先生方の中で一番印象に残っているのは幼稚園の先生だといつも話題にのぼったし、入学、卒業という時には一緒におたずねしたり、私の結婚時にはまずお招きしたりした。母親にとっても最初の教育の相談相手は幼稚園の先生なのだ。それが時代が変わって私の娘の時代にも同じことがいえる。しかしどうも娘たちの場合はちょっとあっさりしすぎている。私はやはりいまだに娘の幼稚園の先生と文通して、こんなに大きくなったといつて成人式の写真など、お送りする。ところが娘たちは無関心に近い。終戦後のなんとなくすすんだ時代に幼稚園時代を過ごしたせいかとも思うけれど、

自分一人で大きくなったような顔をしている。私が、及川先生、新庄先生とつづいてお別れして、何か心のどこかに穴のあいてしまったような気持ちなど、娘たちには理解できないらしい。

幼稚園時代は、クラスで一番チビで先生のひざにのることはかり考えていた私、そして保育科時代も、どうもその甘えがぬけなかったのか、実習中にお子さんに髪の毛をひっぱられて涙を出したりした私。そんな私が、はからずも今、この仕事についていることを、先生方は「おやおや」とおっしゃりながら、でもきつとどこかで見守ってくださる、と私は信じている。

（幼児の教育 編集部）

